

盛衰通記

二十五

姫

戦記

庫	文	閣	内
一五	三四	三	和
一函	七〇	三	書
七架	九號	冊	類

(八十和)

第七

共卅三

内閣文庫	
番號	和 34709
冊數	33(18)
函號	151 60



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



元親運沈也宗九事

在房島於中統之事

安在陣付 志高利時根降

并佐竹降第之事

一宮建立付桐模之事

幣別在房一揆之事 付氏取上全討死之事

津戶島人降付位雄祝之事

長房系初攻入于湯濱之事

幡多為去波川合戰之事 付之武於款首事

野祿城入于元親之事

江島下合戰付山門守信之事

位長江島再發向付 高屋為城并一揆事

位長江別又發向

家康云昇坐付竹代君之服

并一之飯合戰之事 并親世蒙取而當事

二侯城責付 味方と京合戰之事

位長加惣付 屏ヶ崎夜討之事

上

あれは款いり程攻めよと為す六蔵す―拙りに佐長の先陣
とも阿蘇(向)するれいさや詔先より包んで赤てれんと
七右衛門と二子に於て勾と保長の召の少全塚に依りて
主勢百人又二子に少全塚のあつりに依りて勢三百人
元龜元年八月廿七日夜に到りて是内より此を勢とす
はあて防戦中佐長勢いふんに松浦と持てて手前六阿る向
向い周―勢よ常也い志す年の的よりあつて討りしもの二百十餘
級より勢の大勢もあつて松浦助とて海より佐長に是におも
動せよと曰す七日夜大軍と大阿蘇(向)られるる款又さ此の
ことく折あるもや阿蘇と知たに志とす―正しく夜中に
おられり―客に松浦の城より中に公門を帯たつに昨夜の

とにありぬ事と拙意よりあつて今夜も亦少全塚(少)と
いふ山を渡りて佐長の心をあつてさく制をれとも
まうすたやりの老民二百七十餘人あつて前の所よ
中阿蘇に於てさうとを先より切てさく赤て
出でるの外取やして松浦を百餘人さくさく佐長に
さくさく款をいふ六大海内(そ)あつりりりうの海あり
東海(海)城とも仔細南(そ)客―大海内(あ)りて
志う小船の者もし詔を庫取天花寺山渡り亦曰す平
舟人志すよ馳出で船よりあけさるる敵にららあ―
大勢を海(追)てあつて松浦をいぬりりり日赤丸の
りりりり

田方阿蘇城付 松浦の夜行 勢の城 夜行 二年

信長は同月八日よき勢七千人圓陣のよめる大石田城と書
は城ハ七尾ハをあり南と大石田とふ山を對陣せし大石
より大石田まで志んくずり大石と石原城と号す如し
ありて搦手の池原石原城とありて南より西より東に
ふ石原河の城より是を自燒しりて東大石田川あり
信長は東より尚志桂原山と申陣と申は山の一名と申意
もしく池田指之平亦八日の夜石原城にへ向ふ日我大石
の搦手より池田の先陣土を池田原を系ハ本篠原と号す
方より見ゆ家城之あり力戦す衆も勇をあらうりて
おしよひく同亦九日未明より四方一同よせめを志とも城
堅うりて向ひ城とてはて城より夜討の用心あり

具教ハ款の考さほひ家より圓陣を方の味方下知
夜討せよと申御志より志ぬは船江の考とも御志の難を
もらんより己部を志ぬと志ぬとて八百人九月乃
上旬大石田へむひ市場寺井の山に陣せし兵志大石
城と民家名際介ト全り陣（夜討を志し上陣を）火を
放ちられハ志の即に駿動し大石は往は速りる中に
城を般ありめより我ひりきても船江方の志原梯をり
るよ討れり大石の勢を二十六人討死しりは池田
陣（も夜討せぬ）船江方の軍の志を即しりて詳しり

志原城より夜討付魔虫を合戦

兵法本抄射りし事

四日、みよ空あまを嘗せらるも、威怖をせられり。
又、脚川の位をよりて、西の方、魔虫谷の坊に、田丸忠宗の
望めらるし、押寄せて、責りて、城よ、移る、竹濠を
作りて、さきりさきを知らし、池を造り、火よ入て、中身
少のを、持て、塙よ、あふ、款を、寄る、城を、まき、ひく、防て
寄出て、あふ、あふ、に、野、中身、城を、脚田、在、脚、楢、の
棒よ、おて、早に、人馬を、まき、ひく、殺して、城を、ひく、く
人殺を、ひく、く。

脚田、脚川、雲出川の、あ、坊、して、脚の、とく、流、り、時、を、人
四、の、戸、板、ま、り、つて、と、の、こ、り、乳、を、十、の、條、に、入、り、て、あ、と
の、子、一、所、も、二、所、も、と、り、て、上、ら、に、件、の、板、戸、と、あ、あ、り、て

脚の、とく、流、り、時、を、人
帆、此、帆、切、ら、を、ひ、て、彼、帆、板、を、押、ま、て、肩、よ、り、つ、て
二、百、歩、に、あ、ひ、あ、り、せ、し、と、わ、を、ま、き、ひ、く、も、團、对、位、と、寄、り、
に、出、れ、た、山、の、所、ま、よ、り、牛、に、足、付、後、ま、つ、け、り、ま、
團、对、と、あ、り、し、と、り、れ、も、道、狭、く、と、よ、り、ま、た、は、し
と、あ、り、た、池、の、邊、と、り、し、時、脚、田、を、り、よ、り、て、牛、の、後、
あ、ま、を、入、れ、て、山、の、所、ま、よ、り、西、目、并、に、危、後、の、堂、一、人、も
脚、を、ま、き、ひ、く、し、つ、て、池、を、ま、き、ひ、く、牛、を、下、り、り
米、付、牛、を、下、り、と、れ、い、自、今、の、脚、田、を、牛、負、田、と、改
し、し、の、後、つ、り、父、の、角、物、も、た、り、ま、り、た、竹、を、ひ、く、ま
本、を、折、曲、て、橋、を、造、り、と、り、り、

又位者の流名や桂川山よ杉のちよの有りた大の男を出
一上草大板出乃條喰ひ出て我々買ふしむ。

今の圓月位意ハ肥ふとく腹大きたしと極め極と
好まれし取時の人太河内岩をハ大板出と云へる

うくいふしめて城をゆく神いせんの流名や主以甲列
秋山家の侍は桂云云人あり徳本地河内多秋山万と神
秋山志之助と云ふ事より徳本地を呼出て徳男を
射させらるに射矢七八は射御して件の男乃胸
板と杉よ射付たりしと云ふことより可く云へる
ハ倒せたり位者たる一感一と云ふとぬせり又云へる
一に菅巻より上十にち架橋一頼られハ位者件乃矢よ

頼母と背て城守(と云ふ事)はよ名代位者の桂云云
卷のよとれこととるし位者判と云へる是も位者乃
感状乃矢乃面目とそ款もこととるに菅巻一りしと
も存ハとくは城とハ食飯とせんし一とれ大を根は山
ありれハと云ふ事も云へるなり

圓月位者如東村位者名も存候
兼圓月位者字も存候

また徳川方地居たを正官と云ふもの位者(因意)
十月十七日の夜織田勢と城守(引入んと約し)を
城の夜まきり)徳川少治部と云ふものありしものを
見出りしと云へるで橋岡と云ふに右の位よ白杖一れハ

時長丸を打ち取り志のひ入る部を百十餘人殺す
をさすより田志をるものもあくさすに依りては行も
あくるてそえくさるる

圓月の家臣を屋尾をさす智恵暗交とのみ
筑城に初よりを糧の用に難穀油屋新こを
草本があまを好よこらあつて塩原を矢も
某も一年の用をこらつて初め草本を食せりて圓
司あまにも士卒とたに食を同く志るを糧にた
そまうりて是を屋尾の智謀多りてとや

信長は徳川と海を貫きし謀の拙きありと云はれは
一旦和睦して終の功と云ふと云ひて和平をり入らぬ

信長の二男信雄を圓月信意の書子として合葬せんと
云ふは圓月もは平いりてさあし徳川をさすをえ
出づるは終の初と云ふも一旦の謀はて終をや
と云はれはその時執権水谷刑部が信長の初め
あせよ子息を尚書(書子)あきい宛書之の人質をん
はよこらも七既よつまては時あきい終らんと云はれは
はるに一回して事細い元禄元年十月下旬信長圓を
あつてつては信長の伴帯を神宮へ奉寄り宿坊に
地を更ありしに後井を更ハ信長のをたよれとて下旬の時
後井を更よ初せらるるに地を更は信長の
後井を更と述出(田々)と取易せらるるを信長は
後井を更と述出(田々)と取易せらるるを信長は

ゆりりたに船の横にしまし居るはさうりやうな彼の横乃
陸まの天位をの先登り流地と打つけたりはを
軍田御案にけりして行を事多くゆれりては
位共二男を先九十二年ありしを田畠(書)と
を牛生駒まなろ村を前足船十歳小高形正安在
お監村と名命天位位先まの池尻まなろ津川原を
去方夫之命下お百騎と付らふ系先九八船の
系御方に居たりしは船川一登り新津原等に降
卒後ありては雷自船の横に入向具教又子も
船にまゐりて對面せりたり

惣別平均付 芳原 龍城 日 敷 責 一 年

位共二男と大河内小寺二宮三七と神人許りて
國の一黨よ力を合せ合身よ此介位包ハ河津屋ま
りて工友をさくふ船川ハ長崎よ居り方の味方を助
けりては船川 田畠の横地をさし一付の横地を改む
是よりして法おも傳(書)て横地を介と名をては
位雄と位包と惣別南の横地を改に分めたり
雲出川をひて界とせんといふたある系奉りて
一首の古歌を献す

凡早の池の流の急なりハあのと一志の界なり
取よ南の横目的に知れりといふはを流授と
横と立しといふ位共村をたて船川を船お補と

位雄に付らぬ

此川を平にえ東海城とすとの不傷ありたり
還依りて河川の同志とありはぬお祭

平松と名ありて

又松林の守りの人にて平松藩代の特

許を平松藩代は流ありは本とては上あり位とあり

等に到りて平松先丸につけられりて平松先丸を扱

中富中位位雄とありりて同年十二月位長を南方の法

城を破らんとすまの紅江の城の失念を器一城を破れ

り付らぬ是に己の位長一城を破れしを也あは使織田

掃部介松生助守也石原系城よりりて天守を山原に

再兵を起し山原を破りて彼城は某の持城何の事と

紅江城を破却せし又山原の敵討とてあは後山原に

あはしとて河川可作長多知しき今一城と志あり

味方の城とゆへに破れりて乃とてはふよりあは使も

力よ及んずとて作し打破せりて勝会に卒修人人支取

百人紅江の向ふ天守を破りて勝會に修修人紅江を向

ひて織田松生助守也石原系城よりりて天守を破

りて是とては一城を破れしを也あは使も

飛騨林梅修助守也石原系城よりりて天守を破

りて是とては一城を破れしを也あは使も

長門の一揆とては一城を破れしを也あは使も

後山原を平松先丸につけられりて平松先丸を扱

中富中位位雄とありりて同年十二月位長を南方の法

城を破らんとすまの紅江の城の失念を器一城を破れ

古歌よ

伊勢の山田守の表の時多るなり控らる去年は古色
信長は信長と下されし國中一揆は信長と信長を快の友
あり今も友を思ふを思ふれし山田守平均を走しといひ
とられり是は信意は長をきく方多し向ひ進りて城中あり
信長は信長と矢と射んとし人の信意は恨みれは城を
家康と先とて一撃しとれはるる京の城を先途
と神ひ天を祀りもともり勇力智謀も兼備りしを多し大
終に城と守るべき滅亡しる社神様あり

之は信長と先と一揆せしを世に治ししる信長
礼せしは城も守るべき治ししる城と守るべきあり

このの意は浦多し守る人も有りしやは長助うひの
角ゆは天下に名をたし大カよて大カを曲て操を
けり大行を操り志こきて常とせし程の老くしこの
長助はあまよきとぬりの人ともおひしりしうく
一揆もも企むとて

長谷我部滅中し梅多事

去佐乃五中し梅多事し東一の名と城は西二渡川南は
浦戸が合二部を成し長谷城は信一子或は痛し弘長
浦戸あ城とけけ持しや之は長谷我部親合は是
世は中しと亡し信長と度く世をやりてはもくれは夫
身く是世は山守あり力あり月日をとる是世は嫡子ハ

小を仰一父親二男ハ九系親志といふ又息女ハ由中
一の愛女トモくれなうーと申山或ア彼女と申むま
より是世是と幸ひのまにちや或アと婿よなるこの
女の後ハ男子三人ありうーハ申山お監二ハ内祀
三ハ又四多とより是世ハそと申山家の軍法と見
まうーと申山一お監是世う大津の江より程橋乃
娘と親と傳とて世うあし申山うお娘御江より
恥と申して彼娘と奪はる是世はるを申山うま
尸と申梅又お子の是世はるおおまう一お糸
志と申と陳一はも是世取川廿年終よ申山う
又是世う侍よ梅家なる元といふ者大上お名くありう

脚のしり方々長る家奴のまを浪く一取原の城と大
窪中山梅家の作事等と
下知一りう是世是と徳一申て梅家う後申山名録也
まらりて尸なるは長る家奴家一回忠一と板倉取原と
家子に今古まに海をめぐり申山一倍よま一と尸は
ちる元同くうていそした門の程と用と一程橋の城より
志のひくく人殺と取原の合志者取原三年方赤首
の夜取原の城と三ヶ所より取原を兵部も幸く
助りまよあやまらとち少およと交の申山う一ハ板ハ
謀叛人ありとて申山取原の城より申山ハ是世
元親父子うおおありと知てその末めは板倉と出て

海下出で戦ふ力をく奪を絶とせられきと指にして
七年の春秋とて向世多事ありは念取決下の城と
何とせられて押出で威と多しうと後梅等も或れも
疫病を病てあ月の日に死せ元親大軍を攻りて
甲山に存井民初永防とてとも終て打まけ奪を絶と取
破られ降参りて是の人の子に元親の長軍と如しり念
意城の及に二流川を隔るに元親押出で永親を弘園乃
城とてはとを奪ひてりう是より元親に威四州一統と
多しう

元親高取遠化事

元親は中心とせしは弘園遠化城と改めんとす

は遠化城より一將多一季友の女に一季をとり元親
の家を京の礼を遊けて去佐なり將ひ大よびりて
西に多く持一人の土別二流川より西郡に多く一季友
あり遠化より一季友下知りて將多より善をとり
元親元年の春より一季と長男親が一味あり去り年乃秋
一季友遠化を向より元親も加勢よりり終に弘島の城が
金井を長親をとりて遠化を責めんとす元親は一
季友の智恵と流る身多れ世の人はとほりりて謀を
めくらし一季友老久礼城を佐竹信濃より方りり集り
中の親善の辛忍者よりとて法事と誦法多くて多し
のりちよの塔より智よりと見え大某より多れ人の用ひも

あつとき時の人

むう八幡を命に御家の武術家御と近所の氏令は
の御と書られしに御中より粒をのええぬよき女人
さゆりもを法京武則りるに御より物か如女を殺し
後今のもくハ十條のハあるかん時既子病月より御去
の目前まで思女人おあふまぬハよも物よりハを粒
おてをぬしとりるに御家は是にほひて御か物か女子
をあつ切らさせられハ重て御よりあつ武則りりてく
程なく御せしとや

之親ハは幣のよあつて東灘自事利山小川御
とさゆりとまれのいさむさるたむし御より御之れ御と
以て御を佐竹信徳をと近御よりそれより一書を御と
とを御より一書を御の御より一書を御より一書を御
固く御より一書を御

秋を御より一書を御

佐竹信徳より一書を御
元親ハ御と書られし時一矢討て御之と約し一矢一り村
まゆりて是をいさむし一書を御より一書を御より一書を御
御より一書を御より一書を御より一書を御より一書を御
系信徳本号ち人の御より一書を御より一書を御より一書を御
御と書られしに御より一書を御より一書を御より一書を御
御より一書を御より一書を御より一書を御より一書を御

り元親の妻なりよ而も百貫加忠をて上秘記せり
毛刀と云ふは是れ戦傷の組付より是るありの慶長
又信長に今日の相撲目と云ふなりと申すなりと云ふ
二十貫と云ふなり

幣別七郎一揆の事 村氏家ト仙記紀年

元龜元年の秋信長乃ち幣別一揆起す是れ大坂御殿
の惣領も并に檀越ありし御幣七郎の海城丸の加
りりしに御川日夜に我とてむむ御幣より一才田川迄を
めぐりても同心せりしと云ふ

一才田と云ふは元龜野國之田山寺御幣と云ふあり
あり時の人云ふ田川信と云ふは寺の親幣上人の十世

真惠上人と云ふは一人水田の以始て幣別ありは徳川より
一才田寺を建てて一才田の信長應真上人の御子
あり御幣のありと云ふは元龜の是を元龜御幣と云ふ
尚ほ此の妻なるありは婿より元龜御幣を産む
元龜御幣は一才田信長の姉婿大山乃城と
御幣の婿よりありて子孫繁昌あり

傳記述て一才田一才田一才田の御幣御幣の
應子ありと云ふは御幣あり

元龜二年正月信長一揆近所より近江尾張御幣
御幣人を引率して幣別を向る は幣別中御幣西御幣
御幣一才田の御幣あり 御幣の御幣あり 志く
御幣一才田の御幣あり 御幣の御幣あり 御幣の

時氏家ト全先途と破り味方にも敗れて合戦し
軍田も存せしむるなりト全兵を討死す
さうまた信長軍と班し終り

は村田軍所帯の先物と一揆多しとされしと山性
の死に多たう十五軍の時敵軍へ入りて死す
一と也

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍別傳よりあるをうらぐ中野も信長軍人
三七位者ともいふをうらぐ信長軍人元來國體信長
子孫を約しうらぐ信長くたうらぐ信長も同
も中野軍に恨み信長も中野も中野も中野も

元龜二年二月信長軍人隠岐に雄冠とす

秀久方より信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

信長軍人隠岐に雄冠とす

まゝ一先ハ毛と神戶の器八十人礼しりて又中
當中ね位とハ位者乃二男若先凡十位者ト
考一太河内の浪舟大細を具教の身女と位との子とて
名己せ和江乃の東御寺にて祝之の事終り和江の城が
三七位雅と太河内の城ハ凡九ありひり具教ハ東御
三休は長千の三休の衆とふは西の三休のとて大杉ありて
左津宮の奥乃を号し号し依陀の社法を河内紀元に建
十津川を北河上はほく又喉咽を双の祀ありゆり代
の要害とせり

毛呂部元親入湯湯事

毛呂部元親ハ元龜之の春湯に入り湯湯事
河内とらめの大割のを身にひそくに城を出て元親を待
仰し乃をさる元親もあらる力戦をされも母稱元東
小幡の進ハ行は好わりりは付太依の一休具兵之の老天
七毛呂部元親ハ河内の浪舟に出向ひて
二月廿二日元親湯湯に入り湯湯事出向ひて
又太親ハひり母稱河内も行は元親ハ浪舟に出向ひて
左太親ハ浪舟に出向ひて元親ハ浪舟に入り湯湯事出向ひて
毛呂部元親ハ浪舟に入り湯湯事

懐多房去河川合親事付之武佐部首事

一条房が中ハ太依之長部より西二部のありて
は人ハ一条兼良公乃孫教房の子を良の智と東知の

礼を遊て去州（下）給て下伯父を長子あてて房家此
子とまひて婿とて家を継せ一系向大后房通と名あり
之申と考天文十一年大向殿隆う書子とて大向新介
と云一系向府房通云の申し房通の合中房家のハ
去別子居て父房家の礼を継ぎ今悔毎にまがを一系
及と一房家ののりしけ人心荒く慈悲なく家申跡こ
果うり家居去居宗とて女のの二の丸居よてりく
謀を信一謀をまうられ大用のをてりく謀をたれよ
りう家申是よりりく發動中老后大おあうてまが家の
事あひあぬとも是の一旦の謀よえ親をたむりよて房家
と進よめてあまよ世を継せりさんとてえ親の后江村梅後

ちうき（因）一め其の後之れ入申と老后おうてまが家の

の后梅吉花人入申ともりてりて

江村ハ先年一系向後房通御し時え親言か
加給一當時大おりてりて梅吉は縁あるやえ親この申とてまが

悦ひん申性たとて順掌一りめ其をえ親の婿とて

跡留あまよとてえ親自筆の状を以て此書りて方に依て

家后亦皆をぬてりて合せて房家の方（家后状を以てりて

申返事）に及んてまがくに下田のあか（申ひらまあれとてりて

まが房家今まがま極もあく梅吉もあき御すてぬく

まがのり給ふまがのまが友宗麟ハ房家の志とてりて

は宗麟ハ道化長う孫位なる以て入申入申宗家

まが現申上婿留の中あれも宗家の人あは貴殿其

控せりるとやば内証ゆほよと居とありて曾智兼侍り
武久世は流布せりものぬえ親ハ西ノ宿野豫州の界
より南ハ足指迄の灘目とよに今ノ河原とよにあり

野孫城入元親の事

元龜二年七月野孫城を佐伯に命ぜりて躍を好ま
はハ城郭へ出て樂とて居にあり例のよと他へて躍え和
しと居るをよはけ元親の家人赤松の城に在る
丹後守とよの謀を仰て為ると城をよと躍の
場も押寄りれハ佐伯にとよのふりてをよと躍の
途より居押こは軍よと古佐一國ハのよと元親よ
屠し合く候りるや

江州新々合戦自山ノ堂信の事

元龜二年八月信長後井近治のよと山本山と改め又
小川の城并合戦城を責む新村山川合戦の二城あり
まらに居をせり翌九月ハ信長山ノ堂を責む軍よに信長
の思ひのよも山よと火をよと社大寺院とをよと殘家
をよと焼失しりるハ信長もぬく討れよとて是後并に与
せし居候とて近居せりるや

抑比叡山ハ王城の鬼門傳教大原草創の砌ハ桓武
天皇の御教ハ天長地久乃長講ハ止観院よ起
あり本寺ハ大原の那業作の寺像ハ中世乃時
よりありを給ひしとや梵釋四天の像ハ忠仁云の

造立日光月光二菩薩ハ宇治岡白の石をあり
法華三昧堂ハ傳教の草創一乗持渡の體
ハ是れを住し多すり中興の三昧は乃場
修也と也常行三昧院ハ慈覺大僧の建之法
和尚の引受は乃場より住し乃戒壇院と
同大僧乃建立園頓此化の大急戒は靈場より
乃持渡院とすハ又徳帝乃此教真言上乘乃
秘法ハは靈堂より修せり如来遺身の舍利ハ
多寶塔より納めり深草天皇の定心院朱雀
帝乃延會院花山法皇此禪院兼雲和尚の
乃佛院後大泉院の實相院弘宗王の大講堂文

徳天皇の四王院是に如由家法護の乃場西塔
院の新迦堂ハ延壽菩薩の生まじ寂光大僧
乃ととて護命信正守乃とて法法大僧ハ呪
別當慈覺大僧乃梵音を誦一安惠惠亮の
和尚乃湯杖を勅らるるハ傳教大僧の乃作
中堂乃兼作と官相らるるハ醫王菩薩と
一に天人香炉の号よりて園他の水盃を傳
慈禮天人太是乃乃留の文を誦一乃九旬安
后の儀祀もは伽藍より始り横川の中堂ハ慈覺
乃作乃乃の時乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
觀音海上に現一乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

あつれ赤山の神ハ養ひを乞へてろ矢を手に
死りて大原とちてせありふ彼之体とく律して
如きとく赤山の神と西坂中に宗めり如法
堂ハ慈覺大原の建立六根さんけの切御ハ付
及場よりとくまあり二十番神の守護せしこ
是くも相恵和尙の不動尊南山乃洞ノ所
ありし大樂大原乃大威徳西塔院よりま
我ハ秘密臨伽の法念もあり法華讀誦の及
場もあり念佛之時の神も有り圓教の密も
ありとくせきあり

七百餘年乃法鏡もは付しありてあり得へくそえし

明智光秀坂本の戦をちり信長より明智より法實邪を
絵くく

けの智とくは法別古岐の一族にて書本未とて
智の神しとく和知集て浪人神前と神御
ほよは利和知し侍りても懦弱ありとまりて
こそは浪人として信長に侍りしと云

信長法別再發向る所故年月 平一揆事

曰三年二月内并を及て百餘より小倉よとてあり阿閉
隆盛よりいふ所を信長に山乃城とちりせれし
明智と神小信長ハ小倉を治す事一弟(出好)人らに
而しては細川古部氏徳忠を統介とて好む統并

松永等々又謀叛をなすをゆめて上洛せられし細川と長祿
といふ隙を以て松永の隙もいふと云ふし其初めハ之れ
方ありし今夜ハ使者を位長と申し音信しるごとくや
實に河内を壓服ハ天文年体より筑前島山紀伊等處
之れ好む持子ひりて替へて居りし位長の之れを
討つ時其に力あるや田文と申し之れをくんと申し之れ
中の甘くまの島山と云ふ人より其の隙ハ身取らる
交野城と書む城とある島山より二万人と傳へ又
將軍取らるも位長よりも其勢ありて交野の城のは後を
まの之れ好む統松永之秀松永よりて御らるるを
城と書む城申しと云ふて迎ふ又云其隙の甘城と書
るはせと申す松永の城申し之れはよく防く如し遊佐陣
守代教と力ありし之れ松永人平一揆より平ななる
同法あり其先之れして僅の少勢にて城を責む
城の之れお奥田山にホありしけ平一揆より楠正成
持子の愛深の王と傳へし之れより其加護して
るはせと申す

元弘正成は是れ深乃の像とほ醍醐天皇より
勅ありしに正成一統の君に位作し其軍の軍に
御利を以て建武三年正月松永湊川より殺死乃
前より千鈞破城の禁藤原寺の中院に被佛と云
をし正成正儀城をせしは正成と云ふ

可奇至日氏子福利鈕采伴お原生理に
若附早永あし徳子孫に後代高細山定坊
申渡儀思ひ多白

宣月亦百

観心寺中院出房

楠多門系
政成

去承安年中徳子鈕被を責し時も明王の考證ふ
品を執り方しとわは時ハ山名時氏被し一軍之別
奏問を仰ぐ様又子孫に傳ふとて件の輪方徳安
一揆より海に送りしとや

行長江別お紅向と事

る座の成るれハ二好松取も此の城に執事執り
まらふ好養統ハあし入松取ハ秀ハ志堂ハ川久世ハ
海門城ハ申付今ハ信長の子信忠ハ奇妙山曹司と
Pセ一ハ七月ハ申ハ初ハ具足と云ハ一物申今とPセ
甲始の軍に阿閉法政等ハ山印山の城を責め
忽チ責め一ハ相宗秀を主殿せしむ秀在ハ虎法
前山に陣しハ物念海井ハ森澤ハ合戦ハ秀を殺し
福利と云ハ

家康云罪を付竹中代志元後

承一之飯合戦と事 承教世宗承不富事

元龜二年

家康云怪女信長に任叙し給ふ

四月廿のよし日有承七日信長の息女を別渡給

近頃の是ハ

家康云の

云今年亦九軍一

由嫡子

竹代君也淑長のは嫁せしめしよし同日八月二十八日
竹子代君之服せしむ 是時二郡三郡位康之とリリ
今年十二軍ありせしむ 信長の位の名ををせ 是時と云ひ
ちりしハ之知是時城を松平源兵衛あり此一族よりし
是時の城をある人 是時源兵衛ありしけ人女子あり
とて男子あり

家康云の社又信康之と塔よ

九りて是時の家と譲りあ祥とも御ありせられし
是よりして是時の家も此家に入たり 是と云ふ事知れて
是家もせられしと名や 是時之能ありし 是世宗書同
た近同十郡ありし九番の能ありし 信康之兼平と云

望日又能ありて十軍ありし中に位康之神本とある
家康云も奥一給ふは 是世十郡を之出てリ子ハし
の位康之家のものも及ひし 先年源の今川氏あり
ありしは神本能出せしむ 是れ也 是時之とリリハ
家康云不名乃事なり 是れ也 是世出仕は用しよ
と云ふよ 出知しと云ふ事 是世之年 十五月

家康云今名大井川を順えし 源松(海)たきハ位康ハ
是れ也 是れ和睦の神ありし 今及乃順えと云ふ事
位康より信よりし 中入候也

徳川ありしの信

是時ハ此地の城を今名と云ふ 是れ也 是れ也
信云心算ありし 十月中旬百人を率ししを別し 是れ也

同出乾の城と天竺三内京費案内してあり延徳
友城をせむ忽ち成城を以て天竺に於けるの長よ天竺
を京よりして行玄に譲列久世なり

家康公ハ二如野へ出て河坂をおにける軍河一三如
野天竺川乃多しそて中安平八希生年二十五年あり
志う歌の物之流とよく案して味あふ働一りく、まじ
山陣を以て入させると平八りを案遠ハありと名扱又
忠指 中安平八希 以下かくは敵一りく、まじに忠指は家
大進者ゆゑ下知一足付の宿を治大一りくは火のひは
に一と飯まで川をさると也、まじて終日合戦を中安平指に
家入橋井はゆは案田をたり大京作とまじ以下を案また

勇ましくむ力孫藤子の持指も中ハ切折られたり一と
難なく越軍と川をせらる

家康公は中安平八希乃長ねありと作指は
是天竺川の軍也

中安平八希智兼佐て晩年一歳を六十年の山陣の
時、合後川をよて難免の人殺と川をせらる一と

二侯城責付味方京合戦三年一

武田信玄ハ一と飯の軍に指て又二侯の城を以て城を中根
平八りか指ハ喜来又中希松平を案して行玄公の子とを
まじゆ人案指一城を以て中希松平を案して行玄を別ハ案向中

家康公ハ織田一か指を乞ふまじより織田信長ハ人をもつて

渡和磨ちの十二月廿二日味方ヶ島より押出申位玄ハ大勢
申て款地へはさき旅乏しく軍を班さんとす所より渡和乃
めより大軍せんとすむ多井田多左衛門位元後多中を起ぬ人
并候し今日軍と申す

家康云思惟し給ふ所は久保治左衛門は柴田七九郎并候
先と申て死す所後多制を造とも申す申す由揚れり物山嶽
下知て藩を扱けしをわたりしにわしむ山田ハ款の彼一をに
しつて藩を造りて位玄ハ軍を執む位玄ハ款の方より申す
と付所は久保保柴田ハ山田より入り討てり所久保柴田
より入てり所何仙者入り山田は山田は山田は山田は山田は
家康云乃旗本申てり所申す申す申す申す申す申す申す申す

高六河合又高六河合申す申す申す申す申す申す申す申す

家康云軍中申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
力戦す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

家康云と給ふ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
久の果を引て多井田を申す申す申す申す申す申す申す申す

家康云制し給ふ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
多は軍申の制し給ふ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
多は軍申の制し給ふ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
家康云の言給ふ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
より多井田を申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

を急ぎ突て出たり 以時高子のく後より川をくれば
渡和勢ありとく種皮と焼くうくりしはる場も山嶽も
川九名とや以時高目法なるハ端より討死して
家康云と延しなりと

家康云ハ初の城平く入せ多の一時湯後をなせられく
仰枕し多軒高くして御殿あり軍ありとの及所自と
是れなりとや

信長の勢軍自屏ヶ崎初討し事

信長の加勢初兵中飯よ兵を延し信玄二とありて青とせ
佐久も川林あり城并荒川版尾去肥平自九歌よて
八千人の勢と初し軍中ハ多兵あり肥後守大員
中多平八郎
右多二四郎

平八郎右多平八郎の
平八郎右多平八郎 信玄とせめて信玄の勢乃松合にあり

力戦しりるかお紀信守并に信長の勢乃松合にあり

徳川家康と初し事ハ平八郎城初由よ云肥後守なる

河内源五と初し事ハ平八郎人討死中多并思たるハさま

家康と初し事ハ平八郎既し打果さんとせしり双方を合せ

自分の恨めてこの換いさせられしり信玄の軍に討死

して武乃之化とせんといひり多并ハ敵の首三つもよ

は多し初し家康と初し事ハ平八郎討死と首を討てた

元海を流し家康と初し事ハ平八郎首を討て武田の半后土屋

陣守(鬼)大勢と初し事ハ平八郎あひて七層も破つけしり
終りハ陰中くめにせられておそれりあ友の軍に討死

位云并撫下屏の端の野陳と法ふけ夜復松方か大久保
天此亦夜并し武田勢と屏を落し追をありし河内亦言
合戦し於我んと云しとる飯沼正房く利害を痛しと
上夜も去年より徳川と和年の由傳し聞くたもあはれ徳信
より信長せんもたうかすしと亦和言に和ふふしとあはれ
味方の必要も和ふは如きし和言も世傳ふくく四え和しと
後し法めて陣を引拂せり

昨日 徳川家の上程くちあられしと和言せり

因亦和言ハ位云刑部上御年し位云の方(平)の事あり
首と云し一日位云し和言とありしは和言(徳川)の事あり
又ありしとて和言位云の事(徳川)と和言の事あり

一昨日和言合ふとありし言し武田の計しと和言とありし言
し和言も位云和言の確執し如く多しと和言を和言和言
あはれ和言を和言し和言位云も和言も和言和言
和言和言和言和言





